

東三河之古城

215
347

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



Inches 1 2 3 4 5 6 7 8
cm 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19

Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak



Blue

Cyan

Green

Yellow

Red

Magenta

White

3/Color

Black

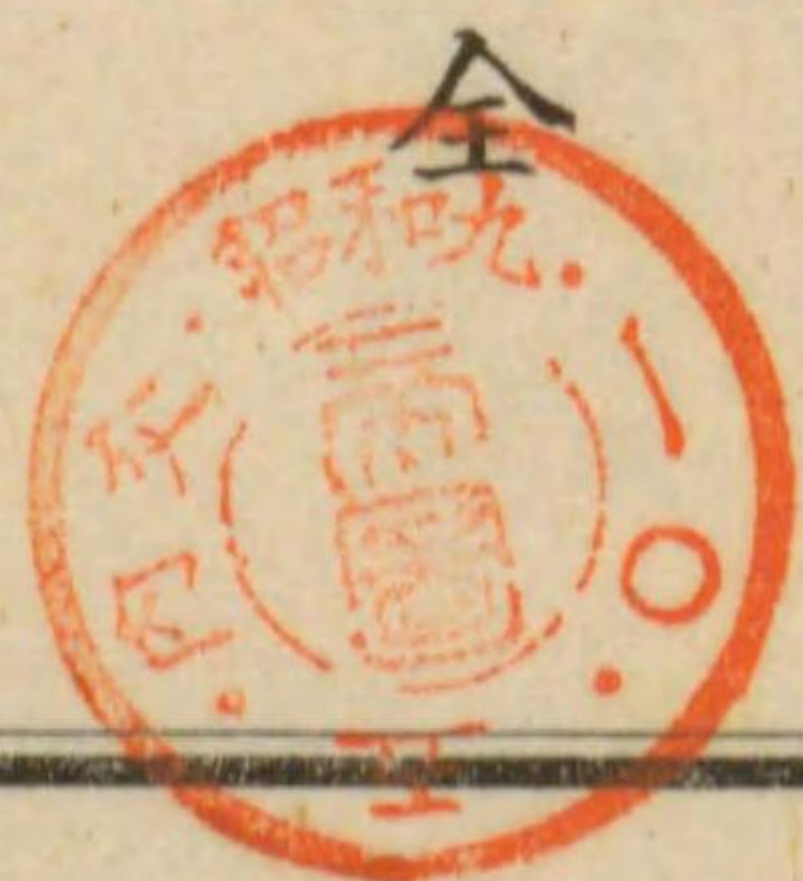
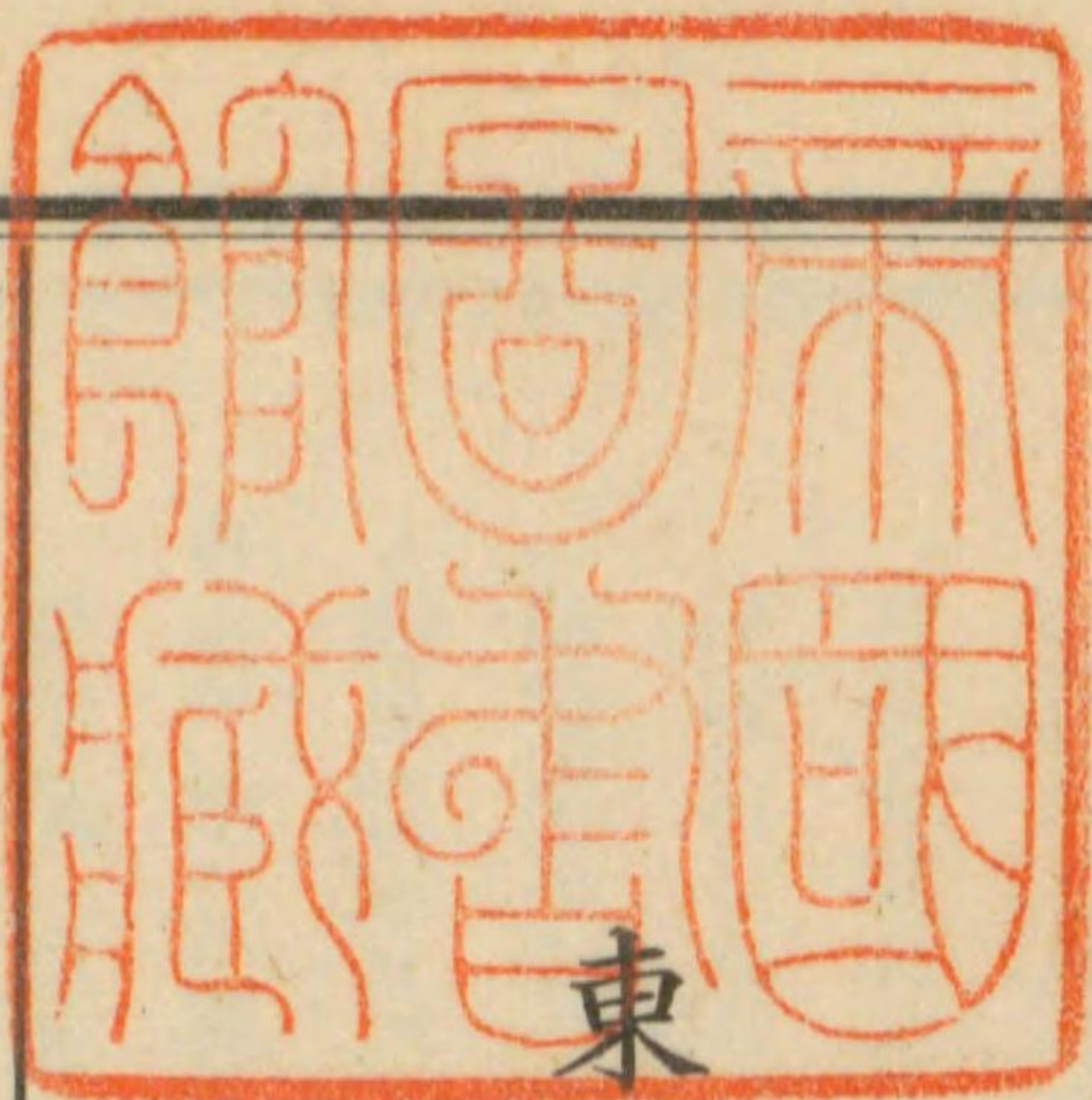
215
347

东

东
之
志
城

鹿城那賀山坦編

三河之古城



松久書店刊

215-347

渥美郡之部

仁連木城

所在地 豊橋市東田町

明應年間戸田氏の祖戸田彈正左衛門宗光の築くところにして、永祿七年戸田丹波守重貞今川氏に叛して徳川氏に通ず。全年五月今川氏眞、小原肥前守に命じ、當城を攻め圍みしかば、重貞防戦努めしも、衆寡敵せず討死す。家康、痛惜措かず、弟忠重をして所領を繼がしむ。後八代康長に至り、天正十八年家康に従ひ關東に移り、爾後廢城となる。

吉田城 (舊今橋城)

所在地 豊橋市中八町

牧野古白明應中當地方を得、永正二年當城を築き、翌三年十一月田原城主戸田彈正憲光、今川氏親の援けを借りて古白を攻めしかば、古白敗戦して討死す。これより憲光二男金七郎宣成をして當城を守らしむ。越えて大永二年古白の子、傳藏(成三)、信成兄弟再び當城を復せしも、天文元年五月松平清康のために攻められ信成、成高等兄弟討死す。以後松平氏、牧野傳兵衛を

以て城代と爲すも、天文六年、さきに敗戦して大崎に退きし戸田金七郎、傳兵衛を追うて再び當城を奪ふ。やがて今川氏の擡頭となり天文十五年十月義元、天野安藝守をして當城を攻撃せしため、金七郎敗北、十一月二十四日今川氏のものとなれり。これより吉田城と呼ばれ、天野安藝守、朝比奈筑前守輝勝、伊東左近將監、小原肥前守鎮實等相次いで城代たり。永祿七年徳川家康當城を攻めて、六月小原氏を敗走さす。よりて家康、酒井忠次を城主となす。天正十八年池田輝政、豊臣秀吉に従つて北條征伐を爲し、戦功ありしかば、秀吉當城を輝政に賜ふ。慶長五年十月池田氏姫路に移りし後は、徳川氏その譜代を當城に據らしむ。

喜見寺砦

所在地 豊橋市新銭町

永祿七年五月十三日徳川家康吉田城攻撃の際、築くところにして、鶴殿八郎三郎長熙をして、これを守らしむ。

雉子山城

所在地 豊橋市高師町

寛正年間此地の地頭富田彈正の居城にして、後黒田右門の居城たり。

草間城

所在地 豊橋市向草間町

芳賀入道禪可が末孫芳賀七郎の居城にして今川氏に屬せり。後畔田監物の居城となれり。

大津城

所在地 渥美郡老津村城山

文明七年七月戸田左衛門尉宗光當城に據り、又彦坂小刑部の居城ともなれり。後永祿七年八月戸田三郎右衛門忠次徳川氏に屬して此に居住す。

波瀨城

所在地 渥美郡波瀨村

渡部彌市郎の居城にして、後同彦太夫紀州家に仕へ高千石を領す。

杉山城

所在地 渥美郡杉山村

杉浦右衛門太夫、杉山久助俊輝の居城なり。

小鹽津城

所在地 渥美郡伊良湖岬村大字小塩津

烏丸家の代官たりし馬場右近進の居城なりしが、延徳年間戸田宗光に討たれ、後大永三年四月戸田政光に亡さる。

日留輪城

所在地 渥美郡赤羽根村

幡豆郡小笠原攝津守の子新九郎安元、徳川家康より赤羽根、芦、赤澤の三邑を賜ひ、當城を築く。

大崎城

所在地 豊橋市大崎町

大永二年戸田金七郎宣成、牧野傳藏、信成等に攻められて吉田城を逃れ、退きて當城を築き、これに據れり。

伊川津城

所在地 渥美郡伊川津村

伊川津七黨大谷、青木、赤松、戸田、渡邊、中村、河合の據るところなり。

田原城

所在地 渥美郡田原町

明應年間、戸田彈正左衛門宗光の築くところにして、その子彈正忠憲光、次に左近尉政光（仁連木城主）、次に彈正少弼宗光これを嗣ぎ、天文元年（享祿二年とも云ふ）五月、松平清康に攻められ、これに降る。後天文十六年九月今川勢大舉して攻撃し、戸田家遂に没落す。これより今川家の臣朝比奈肥後守元智これを守るも、永祿七年徳川家康本多豊後守廣孝をして攻撃せしめ、これを陥る。以後徳川領となりて、廣孝城主となり、次に同康重之を嗣ぐも、天正十八年より池田輝政吉田城主となるに及んで、東三地方の大部分、池田の領地となり、當城も輝政の臣伊木清兵衛忠次これが城代となれり。つゞいて徳川時代となるに及んで三宅氏代々こゝに居城せり。

加地城

所在地 渥美郡田原町大字加治（取手山）
城主不明。

寶飯郡之部

一色城

所在地 寶飯郡牛久保町岸組

永享十一年一色刑部少輔時家(又時氏)鎌倉に破れて當國に來り、吉良俊氏の許に潛みしが、後宮島長山村に來り當城に據れり。その裔刑部少輔文明九年家臣波多野全慶に殺され、以後十數年波多野氏當城主たり。明應二年十二月に至り牧野左衛門成時(古白)灰塚野に戰つて全慶を誅し當城を奪ひ、これより代々牧野氏の居城となれり。

牛窪城

所在地 寶飯郡牛久保町

享祿二年牧野出羽守保成長山の岸に當城を築き、息傳三郎成元、同右馬允成守居住す。後右馬允成定、今川氏に屬し永祿四年吉良義昭の命にて西尾城を守りしが敗れて當城にかへり、同七年徳川氏に降り、同九年卒す。其子新次郎康成これを嗣ぐも、一族出羽守清成所領を押領せんとす。康成これを徳川氏に訴へ、裁斷を乞ふ。即ち家康、成定の遺領悉く康成に賜ひ、又水野下野守信元に命じて、出羽守を國外に追ひ拂はしむ。後天正三年長篠の役に織田信長當城に入りて武田勢と對陣す。越えて天正十八年八月家康江戸に移るに際し康成上州大湖に移さる。

行明城

所在地 寶飯郡牛久保町大字行明字末廣

星野日向守先祖代々の居城なりといふ。

瀬木城

所在地 寶飯郡牛久保町瀬木

明應二年牧野成時(古白)これを築き、次いで二男新次郎此に居住す。

伊奈城(上島城)

所在地 寶飯郡小坂井町伊奈

室町の中期より天正十八年に至る間、本多縫殿助歴代の居城なり。大永四年徳川清康、山中、岡崎の兩城を攻略せし際、城主本多正助徳川に屬し大功あり、その子正忠城主となりて八郎と稱し、後縫殿助と云へり。享祿二年徳川清康、吉田城を攻めし際、正忠清康に従ひ城の東門を破つて先登し、吉田城を陥す。清康進んで田原城を攻撃せんとせしも、城主戸田氏戦はずして降りたれば、直ちに凱旋して伊奈城に入れり。正忠、酒殺を用意し、その武運を祝す。この時城池に生へし、水葵を籍きて殺を盛れり。清康これを見て吉瑞なりとて大に喜び、以後これを

以て微號と爲す。即ち徳川氏の家紋三葵發生の所以なり。

糟塚砦 (小坂井砦)

所在地 寶飯郡小坂井町字檜王

小笠原三九郎の守城にして、永祿四年五月、本多彦三郎廣孝、酒井雅樂助正親を援けて吉良の剛將富永伴五郎忠元と戦ふ。翌永祿五年徳川家康吉田城攻撃の際、本據を一時此に置けり。

篠東城

所在地 寶飯郡小坂井町字篠東

西郷内藏之助俊雄同彦三の居城なり。

一宮砦

所在地 寶飯郡一宮村字宮前

永祿七年徳川家康の築くところにして、本多百助信俊、同弟隼人佐の居城なり。家康、信俊に兵五百を添へてこれを守らせしも、今川氏眞五千余騎を以て攻め圍む。家康これを聞き、自ら兵を率ひて、今川氏の大兵を打ち破りて、道を開き、一宮に達す。後元龜二年五月、武田信玄來り攻む。

牧野城

所在地 寶飯郡豊川町市場字横町

應永四年櫻間助成遠讃岐國より牟呂港に着船、當城を築き牧野と稱すといふ。今川氏に屬し、東三河四郡を領す。

市田城

所在地 寶飯郡八幡村市田

牧野四郎左衛門尉の據城なりといふ。

八幡砦

所在地 寶飯郡八幡村八幡

往古大江定基住居すと傳ふ。永祿五年、板倉彈正、同主水守の據城たり。同年の春、仁連木の戸田、牛窪の牧野と共に、兵を小坂井の東岡に出し、松平氏の將酒井左衛門尉忠次の兵と戦ひ、大に之を破る。然るに松平氏三千余騎を率ひて來り攻めければ、敗北してかへりけり。同年九月再び松平勢と赤坂に戦ひ破れて、遂に松平氏の有に歸す。同七年五月吉田城主小原肥前守來り攻めて、これを陥れ、三浦左馬助をしてこれを守らしむ。

野口城

所在地 寶飯郡八幡村野口字割池

文明中細川民部大輔教春居すと云ふ。後印貝おんずみ甚藏、板倉主水居城す。

御津新宮城

所在地 寶飯郡御津町廣石

細川兵部少輔助久の居城なりしも、文明、長享の頃今川義忠に攻められて落城す。後天文中牧野に屬し、天正中長澤松平廣忠の領地となりて、組衆山田長門守晴政こゝに居城す。

竹本城

所在地 寶飯郡御津町大字廣石字竹本

建武年間新田義貞の十六騎が黨の一人高田薩摩守義遠の二男又次郎政季これを築き竹本と稱せしが、後八世四郎左衛門成久に至り、牧野氏と共に今川家に屬せしも、永祿三年今川家の敗戦と共に居城を捨て、隣村爲當村に歸農す。

茂松城高坂城

所在地 寶飯郡御津町豊澤

御馬城

所在地 寶飯郡御津町御馬

往昔蒲冠者三河守となりて在城すと傳ふ。後足利義滿の頃、細川頼有當城を築く、永和、明德の比は同舍弟頼顯、頼長、次に兵部大夫時氏等あり、又永享、享徳の比は、細川讀岐守成之入道道空幕下の士細川治部大夫に命じて在城せしむ。應仁中外戚酒邊時重當城を守りしも、文明擾乱の際、今川治部大輔義忠に攻められ時重出奔して落城し、後牧主計在城す。

往昔高師直當所を領す。應安年中に至り、細川右馬頭頼有築城すと云ふ。その後兵部少輔頼顯刑部大輔頼長、兵部太夫時氏、治部大輔政信まで數代居城、次いで外戚酒邊河内守時重これを守るも、文明中擾乱の時、今川義忠のために落城し、これより今川領となる。天文の初牧野右馬允成守及出羽守保成等今川氏よりこれを預るも、永祿三年今川敗戦後徳川氏の領となり、つゞいて天正十八年に至り池田輝政の領となりて、その臣山田藤左衛門當城を預る。

佐脇城

所在地 寶飯郡御津町下佐脇

佐脇氏代々の居城なり。享祿天文の頃奥平兵庫助信近居住す。後今川氏の持城となり、その主將板倉彈正重定、同主水當城にあり、同六年佐脇次郎右衛門安信當城を復せしも、翌年再び今川氏の臣三浦左馬助のために奪はる。

五井城

所在地 寶飯郡蒲郡町五井中郷

文治年中新宮藏人行家居城す、子孫藤重郎行光に至り、永正二年二月松平信光七男松平彌三郎外記元芳のために奪はる、その子外記則忠始めて五井松平と稱せり。

長澤古城

所在地 寶飯郡長澤村大字長澤字古城

もと富田左近が子長澤四郎在城せしも、松平信光これを攻めて陥る。その子源七郎親則こゝに居城す。其後七代世々こゝに居住し、天正十八年武州深谷に移る。

大瀧城

所在地 寶飯郡長澤村御城山

戸田彈正政光の居城にして、後鈴木日向守居城す。

鳥屋根城

所在地 寶飯郡長澤村字番場

今川氏の持城にして、糟谷善兵衛宗益、小原藤五郎鎮宗之を守る。永祿七年四月松平元康に攻められて落城す。

鱧塚城

所在地 寶飯郡長澤村字鱧塚

關口刑部の居城なり。

御油城

所在地 寶飯郡御油町

山下源助、林孫八郎居城す。永祿六年松平彌九郎景忠これを守りし時、松平家康來り攻め落城す。

竹谷城

所在地 寶飯郡鹽津村竹谷

竹谷孫七郎守家の孫松平玄蕃允清善、息備後守の居城にして、永正三年八月、今川氏の三河を

征するや、兵を出して岩津に戦ふ。永祿六年九月上郷の城主鶴殿藤太郎兄弟の岡崎を襲はんとするを知り、兵を率ひてこれを攻むるも、鶴殿兄弟能く防ぎ、味方散々に打ち負けて敗走す。時に松平家康の軍來り、清善を助けて戦ひければ、藤太郎兄弟初め一族郎黨討死し、城は家康の手に歸せり。

形原城

所在地 寶飯郡形原町字東古城

鎌倉時代の初、方原下司次郎師光居住す。その後裔なる松平佐渡守與副文明年中此に居城し、永正三年八月、今川氏の三河を征するや、松平長親に隨ひて兵を出し岩津に戦ふ。永祿六年九月松平又七郎家忠これを守る。

上郷城 (宇土城)

所在地 寶飯郡蒲郡町神之郷字城山

紀伊國熊野新宮別當行範の五男十郎藏人行家當城を築くと云ふ。子孫相續し、長門守長持の代に至り、永祿六年松平清康と戦ひ落城す。又鶴殿藤太郎長瀬在城し、後久松佐渡守定俊居住す。

大塚城 (中島城)

所在地 寶飯郡大塚村字上伸島

天文年中岩瀬式部少輔氏成居住し、弘治二年落城すと云ふ。永祿年中奥平美作守領す。

萩城

所在地 寶飯郡萩村

熱田大宮司季兼八代萩左京亮忠廣の後裔、當地にありしといふ。後三淵氏一族、内藤十郎市次、奥平周防守貞光居城す。貞光一時加茂郡大林にありて大林氏を稱す。其子大林兵衛三郎秀光弟大林勘左衛門貞次なり。

茂里城 (森城)

所在地 寶飯郡國府町森字竹下

佐竹刑部太夫の居城なり。

三橋城

所在地 寶飯郡豊川町三谷原字郷中

鎌倉、北條時代飯尾因幡入道居住し、後牧野助五郎の居城なり。

西郡蒲形城

所在地 寶飯郡蒲郡町字舊廓

蒲形の名稱は蒲冠者範賴居城せしに據るといふ。後正平の頃和田虎人兼清居城し、次いで西郡十良國演、岩堀修理亮在城せしといふ。後鶴殿長門守長持の居城となり、永祿六年松平家康、平松佐渡守俊勝、松井左近忠次をしてこれを攻めしめ陥る。次いで久松佐渡守俊勝當城主となる。

丹野山城

所在地 寶飯郡大塚村相樂字荒井

萩原備後守芳信同左衛門佐等居城す。文明二年落城すといふ。

足山田城

所在地 寶飯郡一宮村足山田字東城下

武田の臣秋山新九郎の據りしところといふ。

勝川城

所在地 寶飯郡一宮村東上字勝川

城主不明。

松原城

所在地 寶飯郡一宮村字松原

城主不明。

ヤリデ山城

所在地 寶飯郡一宮村字東上白樂

城主不明。

本宮山城

所在地 寶飯郡一宮村上長山字東水神平

城主不明。

嶽ヶ城

所在地 寶飯郡赤坂町

草鹿砥三河守公宣郷居住の地と傳ふ。

不相城

所在地 寶飯郡蒲郡町府相

城主不明。天正年間家康築きたりといふ。

八名郡之部

嵩^サ山^セ城

所在地 八名郡石卷村嵩山

永祿五年、今川氏の被官奥山修理亮貞範の居城たり。今川氏眞、三浦右衛門佐の讒言を信じ、同年七月、庵原安房守忠胤、小原藤五郎鎮宗等を將とし、三千余騎を添へ、貞範を攻めしむ。貞範此事あるを知り、城兵を木戸口に備へ、矢砲を放ち打つて出で、寄手を追ひ立て防戦し、敵の死傷三百名に及べり。然れ共俄の籠城なれば、糧食乏しく、後詰の頼もなければ、城の保ち難きを思ひ、城兵七十四人を従へ夜、中山を越え、間道より落ち去りければ、翌日今川勢人なき城を乗取りたり。

宇利城

所在地 八名郡八名村宇利

熊谷備中守直盛の居城たりしが、享祿二年、松平清康、右京亮親盛、其弟内膳正信定に三千余

人の兵を添へて大手の大將とし、自らも三千余人を率ひて、搦手の山上に登り、大舉して攻め寄せたり。備中守能く防ぎ、一時寄手を敗りたるも、城門を押破られ、防戦の術なく、遂に城を捨て、遁れ落ちたり。

和田城

所在地 八名郡和田村

古代和田民部居住す。後永祿年中渡部久左衛門其子圖書之助淨、孫山城守茂こゝに居城す。

照山城

所在地 八名郡賀茂村

城主不明。二葉松に山本勘助此所に出生、天正十八年より池田家臣戸倉四郎左衛門住すとあり。

石卷城

所在地 八名郡神郷村(石卷山半腹)

石卷源太其子隼人北條氏綱に仕へてこゝに居住すといふ。

高井城

所在地 八名郡高井村

高井主膳の居城の跡なりといふ。

馬越城

所在地 八名郡馬越村

永享、寛正の頃爲守右馬允同藤馬允の居城なり。

多米城

所在地 豊橋市多米町

城主不明。

西郷城又五本松城

所在地 八名郡石卷村西郷

明應の頃、西郷新太郎信貞の居城にして、永正三年八月、今川氏の三河を征するや、北條早雲のために兵を出して岩津に戦ふ。享祿二年六月、松平清康に降りたるため、同五年九月今川氏眞、朝比奈備中守に命じて來り攻めしむ。城主西郷彈正左衛門正勝防戦努めしも、不意の事とて力つきて敗死せり。此時正勝の嫡子孫六郎元正月谷の城に在りてこのことを聞き、直に馳せ來りたれど、從者僅に十四人にして、群る敵に斬り入りたれば、皆討死したり。次男孫九郎清

員はすでに今川勢のために生捕となりたるも、其の縛繩を振り切つて深き谷間に轉び落ち、死を免れ、野田に行きて菅沼新八郎に頼みて父兄の敗死を告げれば、家康、大須賀、本多、植村、渡邊、高井等を加勢として、清員と共に朝比奈を討たしめ、大に敵を敗り大勝を得たり。依つて家康其功を賞し、父の遺領を繼がしめたり。

西川城

所在地 八名郡石卷村西川

西郷一族の居城たり。

日下部城

所在地 八名郡大和村豊津

城主不明。

柿本城

所在地 八名郡山吉田村大字下吉田字柿本（小路山）

元龜二年徳川武田兩家の和約破れ信玄兵を率ゐて信州路より遠州に入る、此時甲軍の將山縣三郎兵衛昌景設樂郡より八名郡山吉田を経て遠州井伊谷に入らんと欲す。

沿道の土豪皆迎へ降る三州作平の奥平美作守長篠の菅沼新九郎田峯の菅沼大膳之介等亦家康を退き信玄に屬し遠州乾の城主天野氏又家康を離れて甲州勢を引入れ大舉して鈴木三郎大夫が在城せる山吉田の柿本城に殺到す。

眇たる孤城四面皆敵僅に數百の手兵を以て幾万の強敵に對す殊に三郎大夫重時は堀江城攻めに戦死の後なり、嗣子重好は當時猶十四歳の少年祖父長門守は七十余歳の老武者なり勝敗の數知るべきのみ、將卒共に全滅を期して防戦數日の後甲軍井代の城主菅沼常陸守を以て和議を提唱す、軍使の往復九回に及び終に開城し遠州伊平小屋なる鈴木出雲守の砦に引退く。此役に井伊飛驒守及鈴木權藏重俊戦死す。干時元龜二年十月二十二日なり。

上 吉田 城

所在地 八名郡上吉田村字白倉

鈴木三郎太夫の父長門守重勝の居たるところといふ。

大永四年鈴木長門守重勝(二十一歳)築くところなり。

南設樂郡之部

長 篠 城

所在地 南設樂郡長篠村大字長篠字市場

永正五年五月今川氏親の將菅沼元成の築くところにして、其子孫俊則、元直、貞景、正貞代々の居城たり。元龜二年三月武田氏の將天野宮内左衛門景貫其子小四郎景廣來り攻むれば、新九郎正貞迎へ戦ふて激戦あり菅沼道滴始め互に死傷す。城兵城に入りし時、武田の將秋山伯耆守晴近來りて城を圍みしが、田峯の臣城所道壽、正貞の一族城將伊豆守滿直を謀つて遂にこれを下したり。依つて正貞滿直の子、八左衛門を質子として武田に送れり。こゝにおいて武田氏、室賀一葉軒、小泉源次郎、吉田左馬助等を加番としておく。後天正元年七月、徳川元康兵三千を率ひて來り攻む。城兵これを知り、謀を廻らし、特更に旌旗を倒し、又鐘鼓を鳴らさず、恰も人なきが如く装ふ。元康試に火箭を放てば、此日偶々南風烈しく火移りて忽ち二の丸其他外廓を灰燼とす。城兵爲に進退を誤り、漸くにして本丸に引き退きて防禦せるも、これがため軍器兵糧多く焼失して戦鬪力を失ひければ、出で、戦ふことをなさず。元康これを見て敢て一舉に陥擠することをなさず、三輪川の東岸、久間山、中山の二砦に酒井忠次、菅沼定盈を止めて守らせ、寒狭川の前岸有海原古呂水阪篠原岩代の要處に配備して濱松にかへりけり。此報甲州に傳

はるや、武田勝頼、武田典厩信豊を將とし、兵八千を以て正貞を救援せり。馬場信房、小山田信茂、土屋直村、穴山梅雪等、其麾下にありし諸將、長篠城外に至るや、信豊、信茂、直村、梅雪等は醫王寺山、大通寺山、君ヶ伏床、姥ヶ懷、岩代川の邊に、信房は内金二ツ山に陣して徳川勢と數度の交戦をなせば、元康これを聞き再び兵を率ひて、來りて之を激へ討つ。一日武田の將、天野宮内左衛門景貫父子、背後より久間の砦に徳川勢を襲ひければ、八月八日元康伏兵を設け、松葉を焚き、退陣を装ひて敵を誘ふ。馬場信房其煙色を見て謀計なるを悟り、兵を動かすことなく、爲に伏兵起るの機なかりき。後八月二十日城主正貞到底城の維持すべからざるを思ひ、搦手より吉村を経て鳳來寺に退きければ、援兵も亦黒瀬にと退きけり。こゝに於て元康も亦濱松へどかへりたり。元康濱松にかへりて、城開城となるに及び、正貞再び之を築城して之に移れり。元康窃かに牧野康成、戸田志次を以て、正貞に復屬を誘ひければ、正貞一族評議の上満直の異議を退けて再び元康に歸し、元康自筆の誓詞を享く。田峯菅沼氏これを知り勝頼に告げければ、勝頼其眞僞を訊さん爲に正貞を召して、これを信濃國小諸に監し、兵を遣し、城内を搜索す。正貞の士淺井半平之を正貞の室(令閨)に通しければ、正貞の室誓詞を火燧に投じ、幼兒を擁して城を去りたり。こゝに於て元康與平彌九郎景忠を城番に仕じ、次いで松

平又七郎家忠をこれに加へ、越えて天正三年二月與平貞昌を城主となせり。此年五月武田勝頼、甲斐、信濃、上野の兵一萬五千を率ひて包圍す。これ世に名高き長篠合戦なり。この時城兵僅に五百余人なれど、貞昌よく防ぎて下らず、十四日に至り、盡忠鳥居勝商、死を以て岡崎に援を乞ひければ、松平元康、信長と共に進軍し來り、聯合軍を以て、武田勢を打ち破り、與平九八郎一族を救援せり。

鳶巢山砦

所在地 南設樂郡鳶巢山々中

天正三年五月、長篠包圍の時、武田勝頼の築きたる附城にして、武田兵庫助信實を守將とし二百五十人にてこれを守らしむ。此時織田信長長篠表に着し、極樂寺山に本陣を据わ、軍議を爲す。徳川家康の重臣酒井忠次、進み出で、献策をなせしが、信長努つてこれを聞かず、夜に入り窃に使を家康に遣し忠次を召しければ、家康直に忠次を同道して信長に謁す。信長、忠次に云つて曰く、今日の汝の進言至極道理なるも、満座の諸士中、敵に内通するものあるを恐れ、詐り叱し汝を退けたり。今夜急ぎ先陣して鳶巢を襲ひ、敵を討ち盡さば、明朝の勝利疑なしと云ひ、御感の余り、豫て秘藏の忍轡をば賜りたり。忠次面目を施して退出し、直に鳶巢に向ふ。

信長目代に金森五郎八、人數四千人、鉄砲五百挺、横目として青山新七郎、佐藤六左衛門、加藤市左衛門を差添へければ、徳川勢、松平上野介、牧野右馬允、戸田丹波守、菅沼新八郎、西江彈正、本多豊後守、奥平美作守等七頭を以て進みたり。このとき路次の案内には近藤平右衛門、豊田藤助之にあたり、菅沼新八郎は當所の地形に詳しければ自身先に進みて、常には人も通はざる、松山越を攀じ登り、菅沼山へと押し進みしが、暗夜のことなれば、足元も見ぬ荆棘に隔てられて行き悩みとなりければ、忠次智謀を廻らし、木の根に繩を結び付け、案内人の先に立ち、これにつゞきて一人宛、繩に縋りて進み行き、やがて、未明となりて敵の陣屋に近づき火を放ち、鬨を作りて攻め上りけり。これがため武田勢狼狽して大將信實初め勇將多く討死しけり。

久間山砦

所在地 南設樂郡久間山

天正元年七月、徳川家康長篠防戦の時、長篠の向城として築きしところにして、酒井忠次を主將とし、菅沼新八郎定盈を加勢としてこれを守らしめたり。同三年五月長篠包圍、武田勝頼、和氣、大戸、倉賀野、波合等二百余人をこれに據らしむ。

山中山砦

所在地 南設樂郡山中山

天正元年七月、徳川家康長篠防戦の時、長篠の向城として築きたるものにして、酒井忠次を主將とし、菅沼新八郎定盈を加勢としてこれを守しめたり。同三年五月長篠包圍の際、武田勝頼、繩無理之助、井伊彌四右衛門、五味與三郎等と浪人組七十余人をしてこれに據らしむ。

野田城(根古屋城)

所在地 南設樂郡千郷村大字豊島字本城

永正十三年菅沼定則の築くところにして、同定村同定盈の三代こゝに居城す。定盈の時大に修復を加へ、本郡屈指の城壘となれり。永祿三年今川義元桶狭間に戦死し、嗣子氏真暗愚なれば東三の士多く氏真に叛く。定盈又永祿四年春氏真を離れて、松平元康に屬したり。氏真これを知り大に怒り、同年四月遠州に於ける定盈の知行所を缺所し、飯尾豊前守、小笠原肥前守等を先手となして、來り攻めければ、衆寡敵せず八名郡西郷村に引き退きたり。翌年六月定盈兵を擁して不意に野田城を襲ひ之を奪ふ。元龜二年春二月武田信玄の一族秋山伯耆守晴近竹廣表に來襲し來り、定盈設樂守定通及西郷彈正左衛門正樂寺と共にこれを激へ討ちければ、晴近勢の

不利なるを見、兵を引いて退きける。この時武田晴信、晴近に旨を傳へ、山家三方及野田の歸服を計らしむ。晴近命に従ひ、田峯菅沼の老臣城所道壽及作手奥平の臣山崎善九郎を使喚してその目的を達せんとす。定盈獨り節を變せず頑としてこれを卻きければ、其年信玄山家三方衆（作手奥平、長篠菅沼、田峯菅沼）を先方となして來襲したり。定盈一時西郷に退き、後再び築城してこゝに居住す。天正元年正月信玄再び大兵を擁して來り攻む。守將菅沼定盈、加勢松平與一郎忠正、設樂甚三郎貞道等、都合四百人にて籠城よく防戦す。信玄大兵を以て攻め圍みしも少しも屈せず、矢砲を放ち、大石大木を投下し、粉骨碎身して防戦すれば、信玄攻め厭みて引き退き、翌朝より又取巻きて新手を入れ替へく、晝夜を別たさず攻めしが、城中少しも弱らねば、信玄謀を廻し、城端より地道を堀入れければ、城内の井水悉く洩れ抜けて、城中は水盡き、搗て糧米も漸く乏しく成りければ、定盈、その由濱松の家康に注進したり。報を得し、家康は直に三千余騎を引率して、笠比山迄出馬有りけるが、老功の信玄は段々に備を立て、後詰の用意を爲し、且遊軍をも備へ置きければ、寡兵を以て大兵に當り難く、小栗大六を織田氏に遣し援兵を乞ひけるも、信長も信玄の猛威恐れしか、承諾は有りながら、兎角出勢を延引しければ、其間城内水盡き果て、城兵の士氣沮喪し、加ふるに新八郎の甥彈正左衛門貞俊が信玄に

内通するの聞えもあり、新八郎は城の守り難きを見て、與一郎と相談し、信玄の陣へ使者を送り、城中既に水盡きて防戦する事を得ず、我々兩人身を殺して衆に代らんと欲す、願はくは許容あれと申し遣しければ、信玄尤もなりとてこれを許し、兩人を山縣三郎兵衛の陣中に招き、途中伏を設けて兩人を生捕りとなし、しかして城中の男女は、悉く放ち去らしむ。信玄近臣をして新八郎、與一郎に云はせけるは、兩將此度の籠城の武勇義氣頼母しく、信玄感ずが故に、徒に切腹せられんことを惜みて斯くは計らひたりと。徳川氏への義氣は是迄の武勇にてすでに顯れたり、今後天命に應じ、信玄に身を寄せ給へば、三千貫の知行を進上せんと詞巧に説き諭したり。兩將は鉄肝石膽の輩なれば、是を聞きて、信玄の恩命眞に忝なし、然れ共徳川重恩の者共なれば、今更これを變じ難し、速に首を刎ねらるべしと答へければ、信玄益々その義氣に感じ、暫く山縣三郎兵衛に預け置きて、城を請取りたり。然るに當時信玄へ降りたる、奥平道文、菅沼刑部、菅沼新九郎等の徳川氏へ入れおきたる人質と、新八郎、與一郎兩人と交換の事を願出でければ、信玄尤もなりとて、濱松の家康に申し遣しければ、家康も早速の同意にて、交換の事を果しけり。こゝに於て兩將は命永らへて本國にかへり來りければ、家康大に悦び、新八郎の忠烈を感賞して加恩の地を與へけり。このことありてより信玄俄に重病に罹り、長篠城

に入り、山縣三郎兵衛をして城を守らしむ。其後信玄死しければ甲州勢も城を捨て、立ち去り、廢城となれり。

川尻城

所在地 南設樂郡作手村大字高里字城山

應永三十一年奥平八郎左衛門貞俊上野國奥平村より來て築城したるものなり。

菅沼城

所在地 南設樂郡作手村大字菅沼字城山

正長年中木和田三郎右衛門(菅沼氏と改め、新三郎と號し後信濃守と云ふ)の築きしものなり。

龜山城

所在地 南設樂郡作手村大字清岳字市場

奥平貞俊、川尻城より移りて築きしところにして、貞久、貞昌、貞勝、貞能、信昌等代々の居城なり。天正元年貞能、信昌父子此城を棄つるに及び一時廢墟となるも、後慶長七年信昌の第四子松平忠明修築して在城す。

和田城

所在地 南設樂郡作手村大字保永字中島
奥平出雲守勝次の居城にして、勝次名字を和田と改む。

淺間山城

所在地 南設樂郡作手村大字岩波字茶屋

奥平出雲守勝次及貞寄居住すと云ふ。

大和田城(段戸城とも云ふ)

所在地 南設樂郡作手村大字大和田字城山

初め菅沼源助居住し、後天正年中奥平六兵衛居城す。

木和田城

所在地 南設樂郡作手村大字木和田字前山城ヶ峯

涯田左郎左衛門の居城にして、次に櫻井與右衛門居城す。

小田城

所在地 南設樂郡作手村大字守義字平澤連

奥平氏の一族奥平源五右衛門貞春の居城なり。

鴨ヶ谷城

所在地 南設樂郡作手村大字鴨ヶ谷
奥平伯耆守水心の居城なり。

石橋城

所在地 南設樂郡作手村大字清岳寺屋敷
石橋彈正久勝本名奥平の居城なり。

古宮城

所在地 南設樂郡作手村大字清岳寺宮山

武田の老臣馬場信房の築城せるものなりと云ふ。

中市場城(大野田城)

所在地 南設樂郡千郷村大字野田字幹徳

城所淨古齊の居城にして、城所氏は富永氏に仕へ、富永氏菅沼竹千代をして遺蹟相續をなさしむるに及び、田峯に至り一時廢墟となれるも、後永祿年中菅沼新八郎定盈、徳川家康の許を得てこれを修營してこゝに居城せり。元龜二年四月信玄大兵を率ひ、西三河の北部に侵入し、足

助地方を略し、武田典厩信豊、馬場信房、保科彈正昌清、松田清左衛門等をしてこれが壓へたらしめ、自ら山縣昌景、小笠原掃部、根木市兵衛等の諸將を率ひ、田峯城主菅沼刑部定吉、長篠城主菅沼伊豆守正定等を先陣として作手郷より夜を徹して不意に當城を襲はんとせり。菅沼刑部伊豆守正定共に野田菅沼の一族なるを以て、新八郎を攻める意なければ、窃に新八郎にその意を告げ、且つ諫めて曰く、城壁完からず、少數の城兵を以て大軍を防がん事、策の得たる所にあらざれば、早々退却あるべしと。新八郎これを聞きて心ならずも、引き退くべきに決せり。此のときすでに敵の大兵攻め寄せたれど、定盈自若として諸事を辨じ、馬に打乗りて南曲輪より出でけるも、左右を顧み小姓中山與六をして城に火を放たしめ且つ、愛鷹を携へ來るべきことを命じければ、與六意を奉じ城にかへり火を放ち、祕藏の鷹は阿坂九右衛門の臂に据わ、定盈の後を追ふも、やがて海倉の淵に至るや、菅沼刑部の一隊と交戦し享年十八歳にて討死しけり。

新城しんじやう

所在地 南設樂郡千郷村大字石田字萬福

天文元年菅沼大膳亮定繼の築くところにして、其第十郎定氏城將たる時、永祿五年今川氏親の

將稻垣十郎左衛門等野田在番中、舊野田城主菅沼定盈に來襲せられ、防ぐこと能はず退城せるも、本國遠州にかへるを耻ぢ、轉じて、當城を攻撃せんとせしに定氏よくその機先を制し今川勢を敗走さす。後天正二年五月甲州勢のために陥られ、落城せしが、天正四年奥平信昌再び之を築きて居城せり。次に水野彈正忠城主たり。

石田城

所在地 南設樂郡千郷村大字石田字西金國

天正十八年池田輝政の臣。片桐半右衛門、新城に來りてこの城を築きしが、後慶長五年池田氏、播州姫路に移ると共に廢城となれり。

市々浪城

所在地 南設樂郡千郷村大字杉山字道日記岳

永祿三年菅沼定氏これを築き、息藤十郎と共に端城よりこれに移るも、後信濃國に赴くに及び、廢城となれり。

館垣内城

所在地 南設樂郡千郷村大字千歳野



千秋清秀館を設けてこゝに來たり、同朝氏、同清民、同雪氏、同範重、富永直郷、同信實、同久兼、千若丸及菅沼定則之に居り、永正十三年定則野田城に移るに及んで廢城となれり。

白子城

所在地 南設樂郡大字豊榮字城山

佐宗大膳重之の居城なり。

端城

所在地 南設樂郡大字杉山字端城

菅沼定氏、永祿年間息藤十郎定吉と共に此處に移り、後道日記成に轉城、廢城となれり。

鹽瀬城

所在地 南設樂郡鳳來寺村大字鹽瀬

鹽瀬宮内左衛門資時始めて此地に來り左馬助直資、同直家、甚兵衛、久次等代々此に居りしといふ。

大谷城

所在地 南設樂郡東郷村大字平井字大谷

田峯城主菅沼新三郎定廣の築城せしものなり。

國 廣 城

所在地 南設樂郡東郷村大字上平井字國廣

中古富永氏野田城に在るの日、野口秀宗居住すといふ。其後林雅樂助及代官彦坂九兵衛等居住すといふ。

岩 廣 城

所在地 南設樂郡東郷村大字富澤字端城

正和元年設樂左馬頭重清こゝに住す。

川 路 城 (大坪城とも云ふ)

所在地 南設樂郡東郷村大字川路字小川路

初め小川路右衛門之を築き、後設樂氏の臣となり、設樂兵庫頭、同甚之助こゝに住す。

來 迎 松 城

所在地 南設樂郡東郷村大字富澤字鎌屋敷

設樂越中守貞通の屬城にて通根城と云ひ、家臣夏目宮内少輔信久、同宮内四郎入道清宗之を守

る。

夷ヶ谷 城

所在地 南設樂郡東郷村大字上平井字圓の平

奥平土佐守定雄居住す。

布 里 城

所在地 南設樂郡鳳來寺村大字布里

菅沼新助こゝに住す。

恩 原 城 (雨堤城と云ふ)

所在地 南設樂郡鳳來寺村大字愛郷

鹽 平 城

所在地 南設樂郡鳳來寺村大字玖老勢字鹽平

松平宮内左衛門の居城なり。

出 澤 砦

所在地 南設樂郡東郷村大字出澤

設樂越中守貞通の臣瀧川源左衛門助義之を守り居りしが、元龜三年長篠城主菅沼新九郎正貞來り攻む。

北設樂郡之部

武節菅沼城

所在地 北設樂郡武節村

菅沼藤十郎(後越後守定顯)居城す。

武節城

所在地 北設樂郡武節村

川手主水法安入道の居城なり。子孫井伊掃部頭に仕ふ。

八幡砦

所在地 北設樂郡田口町八幡

城主不明。

川手城

所在地 北設樂郡武節村大字川手
川手大藏亮居城す。

黒河城

所在地 北設樂郡園村

熊谷玄蕃天正十一年信州平谷より此に蟄居す。

白鳥山城

所在地 北設樂郡津具村

後藤善心の居城にして、外に屋敷跡二ヶ所あり、武田家の臣中村泰庵、長谷川勘左衛門なる者にて金堀の奉行なりといふ。

濱の城

所在地 北設樂郡名倉村

戸田加賀守の據城なり。

清水城

所在地 北設樂郡名倉村

新田孫六或右衛佐居城す。

鍛塚城

所在地 北設樂郡名倉村

奥平喜八郎、次に戸田加賀守、戸田兵右衛門、松島兵次郎等居城す。

小鷹城

所在地 北設樂郡名倉村大平

戸田加賀守鍛塚城より當城に移る。

岩古屋城

所在地 北設樂郡振草村大字神田字田代

菅沼惠次居城す。

荒屋城

所在地 北設樂郡荒尾村

菅沼伊豆守居城す。

定地城

所在地 北設樂郡定地村

屋形ヶ谷と号す。千秋常陸介範勝尾州熱田より來り大伴氏と改む。次富永隱岐守直郷、同兵庫頭信資、同兵庫頭久兼、同千若丸等居城す。

附錄 古屋敷

渥美郡之部

畔田屋敷 渥美郡高豊村大字豊南

畔田遠江守居住す。

中瀬古屋敷 豊橋市野依町

天文弘治の頃、今川氏の幕下畔田三郎兵衛居住す。

牟呂村古屋敷 豊橋市牟呂町

鵜殿兵庫頭、牟呂兵庫頭正茂居住す。

中山村古屋敷 渥美郡福江町大字中山

間宮造酒允居住す。

伊良古古屋敷 渥美郡伊良湖岬村

糟谷六郎左衛門居住す。この末裔神主となれり。

畠村古屋敷 渥美郡福江町大字畠

間宮權太夫直綱永祿六年今川氏を去り家康に仕へ、此に居住す。

羽田村古屋敷 豊橋市花田町

酒井左衛門尉家人石原百度兵衛居住す。

寶飯郡之部

麻生田村古屋敷 寶飯郡豊川町麻生田

贅掃部居住す。

鍛冶村古屋敷 寶飯郡鍛冶村

眞木越中守定善、同善兵衛居住す。

柑子村古屋敷 寶飯郡柑子村五反田、妙嚴寺領畑地

松平玄蕃家臣鋤柄百度右衛門息樫右衛、權田織部等居住す。

東上村古屋敷 寶飯郡一宮村大字東上

彦坂九兵衛定次居住す。

平尾村屋敷 寶飯郡八幡村大字平尾

平野氏、片桐氏居住す。

千兩村古屋敷 寶飯郡八幡村千兩

岩瀬忠家居住す。

長澤村御茶屋々敷 寶飯郡長澤村

松平上野介一族矢部織部天正の頃まで居住す。

柏原古屋敷 寶飯郡鹽津村柏原

建久年中鶴殿十郎藏人行定當地に一庵を建つも、永祿三年上之郷城落城と共に廢絶すといふ。
後松平勘八居住す。

西方村古屋敷 寶飯郡御津町大字西方

牧野村古屋敷 寶飯郡豊川町大字豊川

牧野古白居住す。

豊川村古屋敷 寶飯郡豊川町大字豊川

源頼朝幼年時代大江入道定嚴此に居住すと傳ふ。後小笠原少目^{さくわん}居住し、後水野佐渡守（吉田城

主水野隼人正弟）同八十郎居住す。

牛久保屋敷 寶飯郡牛久保町

稻垣平右衛門重宗居住す。

正岡村古屋敷 寶飯郡牛久保町大字正岡字南田

牧野傳兵衛成敏居住す。

長山村古屋敷 寶飯郡牛久保町下長山

三ヶ所あり、岩瀬掃部、同名嘉竹、山本市左衛門居住す。

下地村古屋敷 豊橋市下地町城貝津

石田淨玄居住す。

小坂井村古屋敷 寶飯郡小坂井町大字小坂井字倉屋敷

伊奈能藏忠次居住し、後中川勘助、安藤彌兵衛居住す。

平井村古屋敷 寶飯郡小坂井町平井

中野五郎太夫清忠居住す。

篠田村古屋敷 寶飯郡豊川町大字篠田

長澤上野介舍弟松平兵庫助居住す。

久保村古屋敷 寶飯郡牛久保町

牧野平次郎居住す。

赤坂古屋敷 寶飯郡赤坂町成正法寺境内

松平備中守久親居住す。

御馬村古屋敷 寶飯郡御津町大字御馬字濱田

文明、長享中酒邊河内守あり、後永祿五年八月に至り松平上野介康忠此地を賜ふ、二男松平市右衛門相續し、その男又此地にありて天正十七年に至れり。天正年中池田輝政の臣森寺清右衛門忠勝居住し、後松平長三郎居住せり。

芝屋村古屋敷 豊橋市下地町字地之神

山縣三郎兵衛昌景暫く居住すと云ふ。

八名郡之部

下條五井村古屋敷 豊橋市下條西町

白井麥右衛門居住す。

下條堀内村古屋敷 豊橋市下條西町

天正元年より全二年迄菅沼新八郎定盈居住す。

吉川村古屋敷 八名郡吉川村

豊田藤助秀吉居住す。

南設樂郡之部

井道村古屋敷 南設樂郡新城町字井道

菅沼伊賀守三照居住す。

杉山屋敷 南設樂郡千郷村大字杉山字大東

杉山彈正左衛門居住す。

奥平屋敷 南設樂郡千郷村大字豊榮字東平

奥平休嘉居住す。

城所屋敷 南設樂郡千郷村大字豊榮字山下

城所助之亟正縁居住す。

兵藤古屋敷 南設樂郡千郷村大字杉山字野口

永祿年中菅沼信濃守定氏の臣、兵藤蓬生之助居住す。

城所淨古齊屋敷 南設樂郡千郷村大字野田

城所淨古齊居住す。

鹽瀬古屋敷 南設樂郡千郷村大字徳定字西久保

菅沼定盈の臣鹽瀬甚兵衛久次、其子久俊此に居住す。

豊田屋敷 南設樂郡千郷村大字片山字宮の後

富永氏の臣豊田右京之進居住せしが、永正年中八名郡吉川村に移るに及び廢墟となれり。

菅沼竹千代屋敷 南設樂郡千郷村大字豊榮字中田

菅沼竹千代(定則の幼名)田峯より來り、居住す。

下々村屋敷 南設樂郡東郷村大字八束穂字長筋

鹽瀬甚兵衛鳳來寺村より之に移り居住し、後天正十八年、池田輝政の臣井邊平右衛門居住す。

柳田村古屋敷 南設樂郡東郷村大字八束穂字柳田

池田輝政の臣瀧川惣八(一つに小川惣八)居住す。

森長村古屋敷 南設樂郡東郷村大字須長

奥平貞能の臣夏目五郎左衛門治員居住す。

須長村古屋敷 南設樂郡東郷村大字須長

池田輝政の臣萩田庄助居住す。

夏目村古屋敷 南設樂郡東郷村大字富永 舊夏目村

夏目清宗惣兵衛居住す。

吉村彈正屋敷 南設樂郡長篠村大字富保 舊吉村字廣畑

長篠菅沼氏の一族菅沼彈正左衛門貞俊居住す。

大峠村古屋敷 南設樂郡長篠村大字富榮 舊大峠村

植村攝津守泰忠居住す。

海老村古屋敷 南設樂郡海老町字正法寺

天文年中佐野正法寺入道居住し、後文政四年より文久元年まで菅沼氏の陣屋ありたり。

双瀬村古屋敷 南設樂郡海老町 舊双瀬村

弘治年中林左京長政居住す。

道具津古屋敷 南設樂郡作手村大字守義

平野藤兵衛居住す。

川合村古屋敷 南設樂郡作手村大字白鳥 舊川合村

奥平傳九郎居住す。

木和田村屋敷 南設樂郡作手村大字木和田字光林寺前

始め菅沼氏の祖木和田三郎左衛門居住し、後元龜天正年中奥平貞能の家老櫻井右衛門居住せり。

北畑村古屋敷 南設樂郡作手村大字清岳字北畑

奥平貞能の臣兵藤新左衛門居住す。

野郷村古屋敷 南設樂郡作手村字白鳥 舊野郷村

始め野郷兵藏居住し、後美藤(尾藤)萬五郎居住す。

鴨ヶ谷古屋敷 南設樂郡作手村大字鴨ヶ谷に二ヶ所あり

一つは加藤源右衛門(甘泉寺の地といふ)一つは山田十郎左衛門居住したり。皆奥平貞能の臣なり。

赤根村古屋敷 南設樂郡作手村大字高松 舊赤根村

奥平甚右衛門、黒谷久助、同甚兵右衛門及奥平貞能の臣尾藤源内居住す。

戸津呂村古屋敷 南設樂郡作手村大字保永字戸津呂

俗に刑部屋と稱すも、居住者不明なり。

見代村古屋敷 南設樂郡作手村大字保永字見代

筒井善右衛門、原田喜右衛門居住す。

米福長者古屋敷 南設樂郡作手村 舊長者平字木戸口

三河三長者の一なりし米福長者の屋敷跡なり。

北設樂郡之部

奈根村古屋敷 北設樂郡奈根村

伊藤丹波居住す。

別所村古屋敷 北設樂郡振草村

伊藤市之亟居住す。

足込村古屋敷 北設樂郡振草村
 川合源三郎居住す。
 田口村古屋敷 北設樂郡田口町
 菅沼半兵衛居住す。
 寺脇村古屋敷 北設樂郡名倉村
 後藤彈正居住す。
 宇連村古屋敷 北設樂郡名倉村
 戸田加賀守家人後藤高春居住す。
 田峯村屋敷 北設樂郡段嶺村田峯
 城所道壽節、城所清藏居住す。
 小代村古屋敷 北設樂郡田内八ヶ村ノ内
 御殿山の麓に松平宮内左衛門屋敷あり、後世當所の代官松平九郎左衛門の先祖なり。
 川路村古屋敷 北設樂郡川路村
 居住者不明。

昭和九年九月廿日印刷
 昭和九年十月一日發行



發行所

限定出版
 定價八十錢

編輯者 故那賀山 坦
 校訂者 那賀山乙巳文
 出版者 久保田 秀夫

豊橋市西八町一〇四番地

松久書店

電話四九二五番
 振替用古屋敷〇四三番

215
347

三河刪補記

林 自見正森 著
和 裝 全壹冊
定價 一圓五十錢

本書は元文六年長山村の佐野監物等に依つて編纂されし地誌三河二葉松に就き吉田の人林自見正森が補正したもの。植田義方の考訂、更に長篠村醫師阿部去喜の加訂を経て安永四年に成る。本書は刊本なく寫本でのみ行はれて居たのを今回初めて出版されたのであります。ひとり三河とのみ言はず廣く郷土研究に關心を有せらるゝ士の御清鑒を冀望致します。

豊橋市西八町一〇四番地

發行所 松久書店

電話四九二五番
振替名古屋壺〇四三番

215
347

